

史標 74

ISSN 1345-0522

O. D. A.「史標」出版局

2025 年 5 月号

"SHIHYOU" 72
April 2024 (published 1st Marth 2024)
ISSN 1345-0522

Editorial board: Norika IMAMURA, Satono HIKIMA,
Laboratory of Architectural History
School of Creative Science and Engineering, Waseda University
O. D. A. "SHIHYOU" publishing

Room 8F-10, Okubo 3-4-1, Shinjuku, Tokyo 169-8555

TEL: 03-5286-3275
Mail Address: shihyo@lah-waseda.jp

目次 Contents

* * * * *

卒業論文 「池辺陽 モジュール研究の軌跡とその特質」を省みて pp.1-3

The reflection on the graduation thesis “Ikebe Kiyoshi The trajectory and characteristics of Module research

小岩正樹研究室 M1 松野良郁

イギリス旅行記 pp.4-25

Travel Journal of the United Kingdom

小岩研究室 OB 齋藤祐希

* * * * *

執筆者略歴、執筆後記 p.26

お知らせ p.27

卒業論文 「池辺陽 モジュール研究の軌跡とその特質」を省みて

The reflection on the graduation thesis "Ikebe Kiyoshi The trajectory and characteristics of Module research"

小岩正樹研究室 B4 松野良郁

1. はじめに

この度は初めての史標執筆の機会をいただきありがとうございます。B4の松野良郁です。私は普段から常々、考え事や調べ事をしては文章に残す癖があり、少しずつ丁寧に再編集して残していく作業をしたいと考えていました。話のタネは尽きない男であると自負しておりますので今後とも史標にたびたび現れるかと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

今回の表題は「卒業論文『池辺陽 モジュール研究の軌跡とその特質』を省みて」です。論文として語ることはできないけれど文章として残しておきたいエピソードや、まだうまく言語化できていないけれど見えている何かをほのめかすような、そんな内容です。

2. 卒業論文「池辺陽 モジュール研究の軌跡とその特質」を省みて

2.1 卒論概要

私が卒業論文において取り扱ったのは池辺陽という建築家である。彼は建築家であると同時にモジュール研究者として戦後モダニズム期のモジュール研究に火をつけた人物だ。

私が彼に興味を持ったのは、日本のモダニズムに多大な影響を与えたル・コルビュジエが日本において受容される際にどのような需要のされ方をしたのかということについて興味があったためである。池辺陽は多くの雑誌論文を執筆しており、その中でコルビュジエのモデュロールに取り組む姿勢に憧れながら独自にGM モジュール (General Module) というモジュールを開発したことについて論じていた。

モジュール研究といえば1950年代末頃に盛んに行われた研究であり、工業化時代の材料生産の効率化・廉価化を支えたとされる。多くのモジュール研究者たちは工業技術論としてモジュール研究を行っていたが、池辺はモジュールというものが人間の工作行為の連続の中に自然と現れてくることに着目し、美学を見出していたという特徴があった。

私は池辺のモジュール研究の軌跡を、雑誌論文を史料としてまず復元し、先行研究で明らかとなっていた彼の学生時代の美学・哲学的な思想との連続していること、および工業技術論に収まっていなかったことについて明らかにした。

2.2 池辺の功罪

池辺は誰よりも哲学的にモジュールの存在そのものについて論じることに重点をおいていた。そのような姿勢そのものは非常に重要であり、当時のモジュール研究に池辺が熱を与えていたのも、そうした思考があったからであろう。ただ、何度も何度もそのような哲学的議論を雑誌論文を通じて仕掛けてはいたが、池辺の雑誌論文は投稿先がほとんど毎回異なり、読み手にとっては非常に追いつらいものであったことが想像される。

それゆえに世に出たモジュール研究の成果である、JIS 建築モジュールは哲学・美学といったものは関係なく技術論に終始している。また、我々が現在よく目にする天井高 2400mm といった数値などは他のモジュール研究者や施工現場からのフィードバックを踏まえた研究の成果であったことが明らかとなった。

池辺は自身の美学の中で一貫性を持つことを重視していたが、そのような美学が技術論としてのモジュールに反映されなかったことで、現在我々は前近代のモジュールに相当する概念が持っていた比例関係のようなものとは無縁のバラバラとした寸法数値を目にすることとなっている。

このような言い方をすると池辺の方が理論的で良かったというように取られてしまうかもしれない。しかし私は今ではむしろこの一貫性の不完全さに建築は助けられていると考える。

池辺は全ての建築、家具、都市を自身のモジュール数値の組み合わせによって作り上げることができるよう思考していた。しかしながら、もしそれが実現してしまえば建築生産の創造性の余地はなかっただろう。建築の面白さはやはりそこに関わる人の苦難や一つ一つの意思決定が垣間見えることであり、それが無ければ人の意思が垣間見える豊かな建築史も成り立たないだろう。

2.3 卒論の裏話

2.3.1 根源的興味

前述までの内容は端的に卒業論文の内容と絡めて現代に生きる我々と結びつく話として書き連ねたものである。ここからは卒業論文を執筆する裏にあったいくつかのエピソードを残しておこう。

今になって言語化できることだが、私の根源的な興味は、自然、人、建築といった普遍的な概念同士の結びつきについてであり、それぞれがどのような位置づけで関係しているかということである。自然と人間の関係、人間における建築の位置づけや意味、人工物という観点での建築と自然の関係などをよく考えないまま建築をやるというのはあまりにも考えなしで、不健全で、場合によっては後の世代に積み重なった問題を残すことになるのではないかと考えていた。それゆえに設計課題では自らが生み出す建築があまりにも生まれる必然性のないものであること、建築家の作家性に世の中を付き合わせることの怠慢、傲慢、軽率さに辟易し、だんだんと手が動かなくなっていく。加えて特に現代建築は政治的な決定に振り回されるような領域に達しており、スター建築家と呼ばれるような人たちの後を追っても何も社会の問題解決や状況改善につながる恒久的な価値の追求はできないと考えるようになった。

2.3.2 研究室選択と「悪魔の誘い」

このような考えは言語化されてはいなかったが、私の中で渦巻き、研究室選択の時にはすでに現れかけていた。しかし、同時にいくつかの「悪魔の誘い」がまだ残っていたことについて私はよく考える必要があると考え、この場を以て吐露しておきたい。

私はまだ建築史という分野がよくわからず、建築史的観点から設計ができる人間を目指していたが、成果が出やすそうだったり、就職に有利そうな他の研究室と迷っていた。この利益追求思考によって生まれる、架空の選択肢こそが「悪魔の誘い」である。

これは経験則だが利益追求型の人は結果を早く出しやすい。それゆえに一見大きなエネルギーを以てして動いている輝かしい人々に見えるが、おそらく100年後の未来から振り返った時には大した成果は認められていないだろう。私はそのことを確信を持って言えるほどの経験がなく、「悪魔の誘い」にも先があると信じたかった、甘えたかった自分がいた。

そんな時に研究室選択の面談において小岩准教授に「誰かの後を追うのではなく、君は君でありたいのではないのか」と問われ、私の肩に手をかけていた悪魔は消えた。おそらく小岩研究室に入るということは目先の見えやすい、わかりやすい結果はすぐには得られない。しかしながら、私自身の人生が後から価値ある追及をしたと自信を持って言えるのは、この研究室だと直感した。私自身の人生を自らの手で更地に構築していくためにはここしかないと思った。

2.3.3 研究テーマ選択の難航

研究室選択が済むとひとまずは安堵した。しかし、私の卒業論文はおそらく同期の誰よりも難航した自信がある。ゼミが始まってすぐに私は私の追求するものがはるか向こうにあり、知識も経験もない私が始めに扱えるテーマはなんであるかということに直面する。特に私は設計にいかせる理論や現代に生きる理論の追及をすることからテーマ選択を行い、次々とテーマを変更していった。ゼミの先輩方はおそらく私がテーマをあまりにもコロコロと変えるので多くの心労をかけてしまったように思う。しかしながら、はっきりとさせておきたいのは私はテーマを横滑りしながら選びなおしていたのではなく、深く深層に潜っていくようにして選択しなおしていたということである。

日本の現代建築につながる根源は戦争前後にあると考え、最初はメタボリズムから学び始めた。黒川紀章、菊竹清訓のあたりを右往左往し、研究室旅行を終えたころには菊竹のプロポーションと寸法の話を経て、コルビュジエのモデュロールと吉阪隆正について興味を持った。しかし、まだまだ建築の根源的概念にはたどり着いておらず、先輩方にヒントをもらいながらモジュール研究と池辺陽に辿り着いた。実は私は設計に活かせる理論の追求をする手前、独自にコルビュジエのモデュロールを参考に黄金比ではなく大和比にしたモジュールを試案していた。その中で現れてくる数値がたまたま池辺が思考していたGMモジュールの最終形の数列と原理的には同じであることに気が付き、もしや何か重要な意味があるのではないかと考え池辺を研究テーマにした。

池辺陽はモジュールの概念そのものについて深く思考していただけでなく、コルビュジエのモデュロールに影響を受けた戦後のモジュール研究の中核を担っていたため、日本のモダニズムを解明していくことにつながるだけでなく、私の根源的興味ともいつか結びついてくる、一つ目の研究として不足ないものだと考えた。そのようにしてできあがったのが冒頭で概要を説明した私の卒業論文なのである。

2.3.4 池辺の色眼鏡

しかし、私はまだやはり建築史というものをよくわかっていなかったのだ。なぜ比較するのかということについて。私の卒論最終発表は池辺を賛美することを通して私を賛美するものになってしまっていた。池辺の色眼鏡で大局に立つことができなくなってしまっていた。後から多くの反省を経て今言えることだが、私はまた利益を追及して池辺のもとに下ってしまっていたのだ。私は大いに落ち込み、自身の浅はかさを呪った。

そしてそこからはどうすればイデオロギーに浸った自己から脱し、主観性をできる限り取り払って研究対象を評価できるようになるのかを模索し始めた。

3. 構造主義を知る

私はその日から少しずつ自己分析を重ね、イデオロギーを持つ主体としての自己や自我形成プロセス、意識と無意識の関係、人間ほど強力な意思を持たないであろう動物と人間との比較などを通して少しずつ人間という存在の仕組みの仮説が立ってきた。細かい内容はいつかに託すとして、とにかく自分なりに立った仮説をもとに自分がこれまでいかなる心理状態であったのかを説明できるくらいにはなっていた。

その人間分析には卒業制作の失敗も大きく貢献した。チームメンバーとの齟齬も経験しながらとにかく私は私と向き合った。

そして卒業制作が終わった頃、自分自身の人間の仕組みに対する仮説も煮詰まったところで、小岩准教授から薦められた、浅田彰『構造と力』にて構造主義というイデオロギーを比較分析するためのメタイデオロギーの存在について深く知ることとなる。

前から名前は知っていたが、構造主義といういかにもゴツい名前から忌避していた。しかし深く読み込み、解説されている動画なども漁りながら、ついには私の思考形態の先行研究にあたる分野であるということを知った。

浅田彰の解説は構造主義とポスト構造主義を包括して現代思想をまとめており、非常にわかりやすい入門書であるというのが読んでの感想だった。しかしそれと同時に、書かれたのは1980年代であり、現代の我々からするとまだ不足があるように感じた。この不足について思考することが目下の興味であり、これを突き詰めた先には、現代社会のあらゆる問題をイデオロギーで溢れる中から一歩抜け出て評価する姿勢を得られると感じた。

私の考える構造主義の延長線にある思考形態についてはいずれどこかでしっかりとまとめられるよう、諸先輩方や同期の皆と語らい、洗練させていきたいと思う。

4. 戦後モダニズム解明の野望

今はまだ遠い先にある野望だが、構造主義的思考形態のさらなる深化をする中でイデオロギー同士のぶつかり合いである近代以後から現代の建築の流れ、その端緒である戦後モダニズムとは如何なるものであったかということについて論じることに基づくことができるのではないかと考える。戦後モダニズムを論じるとは前近代と近代以後の両方を見ることが必要であり、深い建築と建築史の構造、および人間そのものの理解が必要である。そして今、現代建築が何をしようとも横滑りして諸問題の核心を押さえることができていない感覚があり、それは戦後モダニズムが如何なるものであったかの整理ができていないこと、にも関わらず、いや、それゆえに我々はそのモダニズムのイデオロギーに未だに浸っていること、これら2つが大きな理由であると直感が言っている。

そして生産史研究の観点からいえば、その流れを辿る手がかりとしてモジュールに相当する寸法概念について掘り下げていくことで、フレッチャーの建築系統樹のようなヨーロッパ中心主義というイデオロギーに満ちたものではない、表層的な意匠形態のみに依存しない建築の系統樹を作成することができ、我々は今どのような建築の時代を生きているのか、日本人の社会はどこへ向かっているのかということを思考しながら建築していくことに役立てられるのではないかと考えている。

5. 最後に

随分と大口を叩くんだなあと自分でも恥ずかしくて嫌になる。私は今まで漠然としたことを口に出すのを恐れて自分自身の直感を信じることや人を頼ることができずにいた。しかし、小岩先生や先輩方に勇気づけられて、今は間違えることを恐れず自己開示していく所存だ。私自身の成長を信じて、愚かな私を曝け出していくことにしたのだ。

これくらいのことをやらなければ私は成長しないし、現代建築の行く末を安心して見守ることができないだけでなく、自ら設計する建築物に吐き気を催すことから抜け出せないだろう。何年かかるかわからないが、底が見えるまで取り組んでみたいと思う。

イギリス旅行記

Travel Journal of the United Kingdom

齋藤祐希

私は修士最後の夏に、修論のための調査も兼ねて一人でイギリスへ訪れた。その際の経験をここに記す。あるいは、建築史の研究室なのだから見てきた建築について連ねたほうが良い気もした。だが、私の見聞きした裏取りできていない不確かな情報を、さも正しいかのように並べるのは憚られる。だから私は、旅行を通しての経験について、散文を書くことにした。そもそも、建築は自分で見に行った方がよっぽど良いのである。イングランドを一周した形のため、ロンドンでの観光は少ない。ロンドン以外へ旅行へ行きたい物好きは、参考にできる部分があるかもしれない。

9/8

羽田空港。搭乗を待っていると、二人の外国人女性が自販機の前で困った様子で佇んでいた。曰く、クレジットカードが使えず日本円も無いらしい。自分で試してみたが確かに使えず、私が代わりに小銭で水のペットボトルを買って渡した。二人は私に恐縮しきった様子で黒い財布を出して、しわくちゃの米ドル札を渡してきたのである。あとでそれが15ドルだと気づき、彼女らの姿を探して貰い過ぎだと返そうとしたが、笑いながら「いいのよ」と言われた。なんだか良いことをしたような、してやられたような出来事であったが、私のイギリスへの旅はそうにして始まったのである。

機内。14時間を共にする私の席は、一番前でエコノミーにしては空間が広く快適だ。あえて欠点があるとすれば、CAさんがずっと目の前におり、若干気まずい事である。彼女の英語は流暢かつ上品すぎて逆にわからない。当日は台風で、出発していないのに機体が揺れ、離陸が大変に遅れていた。しばらく遅れた後での、機長からの「さらに20～25分くらい遅れます」というアナウンスに対する、CAさんの「今25分って言いました？」という文句だけは聞き取れた。結局、それ以上に待ったのだが。

私は旅行前にHISのヨーロッパ専門店で相談をしていた。その際に言われた「あちらでは割と機械が壊れています」という言葉を、まだ日本なのに思い知らされることになる。まずWi-Fiがない。Wi-Fiのマークはあるのに、機長は「離陸後はWi-Fiをお使いください」とアナウンスした直後に「すみませんこの機体Wi-Fi無いらしいです」と言っている。まさかの14時間オフライン環境であった。そして席のモニターが壊れている。タッチパネルが反応しない。リモコンがあると教えてもらったが、そのリモコンも十字キーと決定ボタンが壊れていた。何もできないガラクタがそこにあった。私は14時間を手持無沙汰に、ただ耐える羽目になる。

ブリティッシュ・エアウェイズ、ヒースロー空港行きの機内はさすがにイギリス人が多かった。隣の席もイギリス人である。昼になり機内食が運ばれてきた。米とチキンの何かである。正直なところあまり美味しくはない。隣のイギリス人は箸でそれを食べ始めた。フォークもスプーンもあるのにまず箸で。それほど普及しているのかと思ったが、周りを見るに彼くらいなものである。

私のたどたどしい英語でもって、隣の彼に話しかける。日本を訪ねたのは今回で二回目で、その帰りだそう。箸の練習をしており家にマイ箸があるが、外食だと箸が使えずイギリスだとなかなか練習できないとか。アーティストであり、日本にスタジオがあるらしい。私はネットもモニターも使えず酷く暇であったため、彼と駄弁ることにした。猫を三匹飼ってるらしく、お互いに色々写真を見せたかったのに、オフラインだったためにうまくいかなかった。ロンドンでおすすめの場所を教えてください。結局名前も知ることはなかったが、彼のお陰で私のイギリス人との会話のハードルは低くなった。

ヒースロー空港に到着。ターミナル間は席の無い電車で移動する。入国は一瞬で終了した。特定の国のパスポート（日本を含む）を持っている人間は、自動読み取り機にパスポートを乗せて顔認証するだけで終了である。

今夜の宿泊はバースとなる。Elizabeth Line で Paddington まで乗る。イギリスの電車に乗る時は、まず日本の駅と比べてかなり看板が少ないことに注意するべきだ。どこに何行きの電車があるかわかりにくいため、迷ったらとりあえず駅員と見られる人に尋ねた方が良い。大抵快く答えてくれる。

車両にはキャリーケースなど大きな荷物を置くための棚のようなスペースがある。席にまで持っていくことはあまり良しとされず、大きな荷物はここに置くべきではあるのだが、気をつけたいのが盗難だ。イギリスは比較的治安が良くはあるが、警戒するに越したことはない。鍵付きのチェーンを付けておく。

Paddington 駅で夕飯を購入するため構内をぶらつく。まず目についたのは wasabi (わさび) の看板であった。今後イギリスで度々目にするそれは、日本料理の弁当的なものを売っているチェーン店である。サーモンの寿司やらカツ丼なんかも売っている。時折日本の味を食べたかったら、ここに行くのが吉である。



サンドイッチを買い、Paddington 駅から Bath Spa 駅へ。バースはイギリスでは珍しく温泉がある、歴史的で統一的な景観の街である。まずホテルへと直行。フロントの英語は早口で、正直なところ二割くらいしか聞き取れない。ニュアンスで対応する。予約票とパスポート、あと何か追加でお金を取られてチェックイン。普通の日本のビジネスホテルと同等の部屋だ。これで一万円以上するのだから恐ろしい。

時間があつたので夜のバースを散策する。ラグビーワールドカップの最中で、そこらのバーのテレビでラグビーが流れている。車道とは別で歩行者用の路地と広場があり、中庭のようになっていた。部屋に戻り、買っておいたサンドイッチを食べて就寝。



9/9

朝食はビュッフェ形式であった。不格好なソーセージと、炒めたマッシュルーム、豆、フライドポテト、練り物を焼いた何か。パンは豊富に選べ、ワッフルメーカーなんて子供が喜びそうなものもある。イギリスの飯については覚悟をしていたが、存外悪くないというのが最初の印象であった。そう、最初の印象だ。



イギリスの気温は日本と比べて低いと聞いていたが、それでも長袖でいるのには暑すぎた。半袖の服が足りんと思い、開店早々に服屋へ行き二着購入。サイズはイギリスでも普通にXLで良さそう。こちらでは会計時に挨拶だけではなく軽く雑談することが当たり前らしい。さすがに外国人である私には最低限のやり取りだけで済ませてくれたが。

流れで昼のバースを少し散策する。今日は駅周辺。白っぽい茶色の壁で統一された町並みは、どこかローマ的である。まさに観光都市だ。物語の世界を歩いているような気分になる。飲食店はカフェ、バーガーショップ、ピザ屋が多い。イギリスもずいぶんアメリカナイズされているらしい。バース市街でも、「ロンドンと言え」の二階建てのバスを拝むことができた。



今日はグロスター大聖堂へ行く。バースの中心にも大聖堂があることに気づいたが、そこは後日行くことにした。ロンドン行きに乗って行くつもりだったが、明らかに混んでいる上に当然のごとく電車が遅れている。調べてみると逆方向の電車に乗っても行けるらしく、Bristol Temple Meads 経由で行くことにした。

私はイングランド全土（地下鉄を除く）、電車に乗り放題のパスを買っている。それもファーストクラスに乗れるものだ。日本のグリーン車ほどの快適さはないが、何より人が少ない。他の車両には座りきれないほどの人が居るのに、この車両には私を含めて十人も乗っていないのだ。それほど値段もはらないので、ロンドン以外の場所も行く人はファーストクラスを購入することをオススメする。ファーストクラスは特急くらいにしか無く、少しの電車移動だけだと出番が無さそうなのは考慮しておこう。

Bristol Temple Meads は大きな駅である。いくつもホームがある上、なんと一つのホームに二つプラットフォームがあったりする。これは大きな駅だと当たり前のことであり、ゆえにイギリスの駅はとてもややこしい。それで二つのプラットフォームの片方に到着予定の電車が遅れたら、もう一つに停まる電車はどうなるか。答えは「当然遅れる」。ダイヤがぐちゃぐちゃになる。ちなみにイギリスの電車は七割方遅れる。

7 番線で待っていると「グロスター行きに乗る人は 15 番線行ってください」と突然言われることもある。実際私はそうアナウンスされた。日本人諸君は駅のアナウンスは聞き流していることと思うが、イギリスのアナウンスは逐一耳を傾けることだ。そしてアナウンスの通り、乗客全員で移動し 15 番線で待っていると、「グロスター行きに乗る人は、7 番線に電車が来ているので移動してください」と言われる。また全員で大移動だ。何だこれは。なおイギリスの電車は扉が開く度にエラーのような大きな音が出るが、開閉するたびに鳴るので気にしないことである。

グロスター大聖堂は、イギリスのゴシック様式の天井に見られる特徴的なリブ・ヴォールトが美しい建築である。特に回廊の扇形リブ・ヴォールトは大変装飾が細かく、ハリー・ポッターの廊下の撮影場所になっているとのこと。その回廊を歩けば、石に囲まれているのに花畑にいたような華やかさがあった。そこで撮影している日本人の二人組と会う。ロンドンから一步出るとアジア人と出会う機会は大変希少である。



今日は Heritage Day らしく、グロスター大聖堂の石工の工房でワークショップが開かれていた。彼らの仕事、加工痕での時代の見分け方（滑らかで磨かれている方が時代が下る）、石の種類（特にライムストーン）や由来などを聞く。さらにマスターメイソンとは西洋と日本お互いの建築に関して情報の交換をした。



昼食はグロスター大聖堂内にあるムンクキッチン。店員オススメのキッシュを注文する。しかしこのキッシュ、なんだかモソモソしているのである。パイ部分が油っこい上に、口の中の水分が吸われるほどパサパサしており、舌の上で粉の味がするのだ。イギリスでは生地のある料理は地雷である。地獄のごとく美味しくない。また、野菜には何もかかっていない。イギリスでは各々がソースをかけるものだと聞いたが、この店ではかけるものもない。他の店ではケチャップと茶色いソース、モルトビネガーがあったりする。それなら家で食べるほうがマシだからドレッシングをかけてくれ。仕方なく茹で野菜をママで食べる。イギリスでは野菜は茹でるものだ。生のサラダは出てこない。ただ、マヨネーズをあえればどんなものでもうまくなるとイギリス人は知っている。それ故に一つのお盆に二つのマヨネーズ料理がある。人参のマヨネーズ和えと玉ねぎのマヨネーズ和えでマヨネーズとマヨネーズが被ってしまった。おまけにドリンクにコーラを頼んだが、冷蔵庫から取り出したのに冷えていない。イギリスのドリンクは冷えてないことが多いので、氷があるところは氷を頼もう。私はイギリスの食というものを痛感した。なお別に不人気店という訳ではなく、結構お客さんは入っていたことをフォローしておく。イギリスという国自体のフォローにはなっていないが。



大聖堂の周辺は芝生のスペースがあり、ピクニックというか、寝そべったり腰を下ろして談笑する姿がよく目に付く。日本の寺社仏閣の境内と違い、建物の一歩外はもはやそれほど広くないただの公園である。あまり建物の外への意識がないのだろうか。

帰路。バス行きの電車が来たが、乗り込むなり、ムワリと熱気が立ち込める。どうも冷房が壊れているか、無いらしい。あまりにも暑いため、一本後の電車に乗ることにする。なにせ暑いからって車内で水配っているのである。それはもう現代の電車としてダメだろう。ちなみにイギリスの電車はたまに冷房が動いてないやつがある。イギリスの機械は信用ならない。

バスに戻ると、バス寺院の前の広場でピアノを演奏してる人がいた。日本よりも音楽が身近にある国だ。街を歩くと演奏している人を見かけることがよくある。

夕飯は日本料理店に行く。明らかに中国人経営なので、日本料理ではなく炒飯とカリフォルニアロールをいただく。大変美味。地獄のキッシュの後だとオアシスである。なお店員のワサビの発音が「ッサービィ」なので、何度か聞き返す羽目になった。



9/10

雨の中のバースの街をうろつく。イギリスにしては土砂降りらしい。イギリス人は傘をささない聞くが、さすがに彼らも傘を差すレベルであった。観光名所らしきところへ行くが、もはやどこも同じ町並みなので逆に新鮮味が無かった。橋の上に店が立ち並んでいる光景は西洋らしい。適当にうろつくだけで楽しい街である。



今日はマナー・ハウスのグレートシャルフィールドマナーへ行く。スタバで時間を潰し、Uberでタクシーを手配した。黒い車に乗ってきたのは、ぶっきらぼうな黒人の運転手だ。ずっと携帯で何語か（英語ではない）で話しており、話しかけられていないかビクつく時間を過ごす。去り際、彼から謎のゲーサインを貰った。

イギリスではほとんどの店でクレジットカードが使える。逆に現金が使えない店の方が多く、基本的には現金は使わない。だが田舎は別だ。グレートシャルフィールドマナーでは入場料が現金のみだった。これを見越してポンド紙幣を持っていたことが功を奏す。

マナー・ハウスの裏には馬房があり、何頭か馬がいた。中世当時は馬がいて当たり前だったことだろう。人に慣れており大人しい。彼らを眺めているのはいい時間つぶしになった。



このマナー・ハウスを見学するためには、定期的に関われる、ガイドが率いるツアーに参加しなくてはならない。こんな辺鄙な場所に平日に来る人々は、老年の夫婦か、こういった遺産が好きな物好きしかいない。一人の歴史好きであろう女性がしきりに質問をし、場はディスカッションのようになっていた。当然早口の英語は聞き取れない。

ホールには鹿の頭が十個ほど並んでおり、こんなに飾るものかと疑問を抱いた。石造りの外観とは対称的に、室内は木でパネリングされており温かな印象を受ける。電気もつけられておらず薄暗かったが、窓が大きく日が差しているため、生活するには事足りるだろう。玄関を監視するために壁に穴が空いていたり、壁にかけられている石仮面の目も壁の先が覗けたりする。見た目こそシンメトリーであるが、内部はアンシンメトリーである。やはりホールの片側が明確に上位を示す構造になっているからだ。しかし私室などは後世に改築されるなり、使用方法が変わったのか、有軸性は見受けられない。長く住まれていたからこそその歪さがそこにあった。

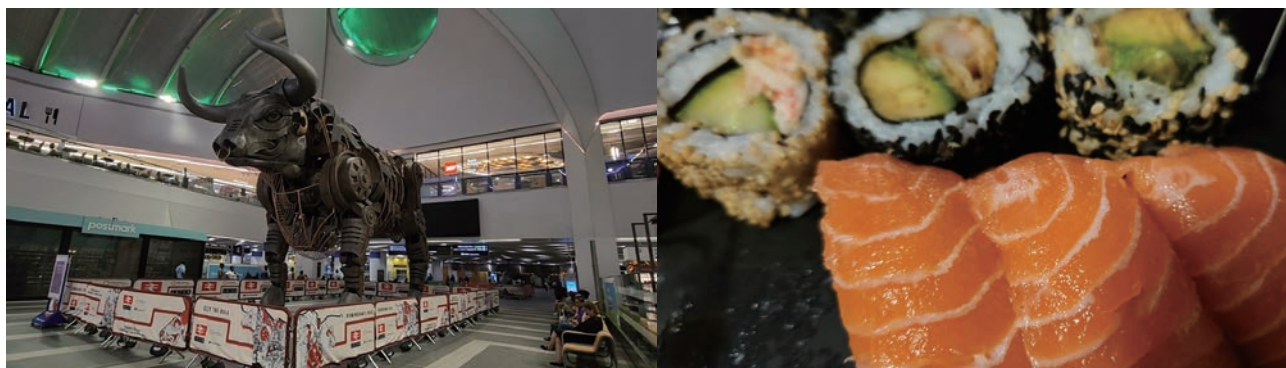
マナーハウスの外には庭園がある。木を丸く成形しており、入口があって中に入ることもできる。マナーハウスの中にはチャペルがあるほか、隣接してチャーチが建てられており、さらに庭園を挟んだ奥に小さな礼拝設備もある。教会は確かに彼らの直ぐ側にあった。それぞれ用途や使う人が違ったのだろうか。

バスへ戻るためにタクシーを探す、電波が弱い。結局タクシーは見つからず、最寄りの駅まで歩いて帰ることにする。道程の 1/3 くらい行ったところで、後ろから来た車が停まり声をかけられた。正直なところ数 km なので歩いて帰れる距離なのだが、「この距離を歩くなんて」と大変に驚かれ、親切にも拾われることとなる。ナショナルトラストメンバーの、歴史的建築にやたらと詳しい若夫婦であった。最寄りの駅でもある Bradford-on-Avon には古い建築が多くあると聞かされる。しかしこの村に滞在する時間はない。もったいないことであった。14、15 世紀の建物をいくつか指差しで紹介してもらう。



バスへ戻り、バス寺院を見学。見事な扇形ヴォールトであった。時間もないので早々に切り上げ、ホテルに預けていたスーツケースを受取りバーミンガムへ。お馴染みとなった Bristol Temple Meads で GWR から CrossCountry へ乗り換える。ここでもファーストクラスは空いていた。

バーミンガム駅は構内にどデカイ鉄の牛が構えている。近代的な産業都市であり、歴史あるロンドンやバースの雰囲気とは異なり、アメリカの都市のような印象を受けた。なお日本系弁当屋 wasabi はここにもある。サーモン寿司を購入。安定の美味しさ。イギリスは北欧に近いだけあってサーモンが美味しい。少なくとも寿司の場合。



9/11

ストークセイキャッスルは駅から徒歩でそこそこの距離を歩かねばならないが、意外と行きやすい印象であった。勾配がほとんど無いから、散歩のようなものである。Google マップを頼りに草原を歩けば、石造りの塔が見えてくる。

黄色いゲートハウスをくぐれば、ずんぐりとした灰色のホールと塔のお出ましである。グレートシャルフィールドマナーとは違い、生活感のない廃墟である。巨大なホールはどうしても薄暗く、寒々とした印象を受ける。ここで皆で食卓についていたと言うが、その空気をはっきりと像に結ぶことはできない。外から見て連続しているように見えたソーラーから伸びる廊下と塔は実は壁で隔たれている。しかもその壁が家よりも古いよりオリジナルなものだということだから、この廊下の存在意義を測りかねる。



塔は窓が小さく、改めて見ても防衛設備として建てられているように感じる。当時の生活の再現図では地下一階を鍛冶場として、地上階以上は生活の場として使われているように描かれている。しかし暗さ、頑強さ、無骨さ、他の部屋からのアクセスの悪さからは、生活の匂いを感じ取れない。建設当時何に使われていたのか。塔の上に登れば、見晴らしのよい展望と、隠れて外を監視するためのスペースがある。ちょっとした基地のようだ。

この円柱のような南塔とは別に、後年建てられた北塔も存在するが、こちらは逆に全て木製の生活スペースである。その他、半地下空間には厩舎や料理場があったり、その動線は垂直方向に少々入り組んでいる。動線を整えるよりも、見た目というか、建物を箱としてみたときのシンプルさに重きをおいている印象を受ける。それは外見を重視してなのか、構造上シンプルなものしか立てられなかったのかは不明だ。

土産物屋で蜂蜜酒（ミード）を試飲。西洋ファンタジーによく登場するものだが初めて味を知った。中々飲めるものではないので土産に一本購入する。ついでに本を二冊購入。



最寄り駅で謎のボロボロの服を着たおじさんに絡まれる。イギリスでは一人旅をしていると声をかけられることがままある。しかし今回は彼の言っている言葉がわからない。とりあえず Shrewsbury へと答えると、彼は「いい旅を」的な言葉をくれ、また別の人へと話し掛けに行った。やはり謎のおじさんである。ホームへ来た電車へと乗り込む。車窓から見る Shrewsbury Abbey は興味深かったが、今回この町では乗り換えるだけである。この旅は忙しい。

バーミンガムへ戻り預けていた荷物を回収。バーミンガム駅では、また電車が遅延してホームが変更となった。一体何回目だ。車内では水やお茶、コーヒーのサービスが充実しており、ついでにサンドイッチも貰えた。やはりファーストクラスは乗り得である。

リーズへ到着。本日の宿泊予定地である。出口の看板に従うと、薄暗い地下道に出る。流石に夜ここを歩くのは怖い。Google マップを見ながら早足でホテルへ。

宿泊するのは昨日までのそれより一つランクが上のホテル、Quebecs Hotel である。外装は赤レンガ仕立てで、クラシックな雰囲気がある。流石にランクが高いこともあり、従業員の所作が美しく親切である。着いてそうそう高いディナーを頼む勇気は無く、今夜は駅中のケンタッキーでテイクアウト。イギリスで気をつけるべきは、例えばコーラを頼むとデフォルトが無糖であることだ。なので「砂糖入りを」と追加で頼まなければならない。砂糖入りと注文しても無糖が出てくることがある。今回はゼロコーラ（ミス）。そこで健康に気を使うなら普段の肉と油とパンばかりで野菜のない食生活を治して欲しい。



ケンタッキーは日本のものとあまり味は変わらない（少し風味に違和感はある）。ボックスを頼んだのだが、中に何故か茹でとうもろこしが入っていた。これがぐじゅぐじゅとしていてあんまり美味しくないのである。なぜ茹でとうもろこしをこんなに微妙な味に調理できるのか。



9/12

朝食は白いクロスの引かれた丸テーブルで。まず紅茶をいただく。イギリスだ。当然美味しい。食パンは白か茶色か聞かれ、その両方を選ぶ。千切った欠片にたっぷりのバターをのせた。今日注文したのはトラディショナルイングリッシュブレックファスト。いびつなソーセージ、ベーコン、フライドトマト、マッシュルームを炒めたもの、謎の肉系の焼き練り物、スクランブルエッグ、フライドブレッド。お気づきのことだろうが、二日目の朝食とほとんど代わり映えがない。イギリスの朝食のラインナップはほとんどこれである。ビュッフェ形式だろうがこれ以外のメニューはほとんど無い（ヨーグルトくらいか）。まあ悪くはないのだが、想像以上の味もしない。野菜はないし朝から食べるにはヘビーだ。いつもと今回で違うのはフライドブレッドなる代物である。その名の通り、食パンを揚げている。これが大変油が染み込んでおり、しつこくて重い。そのうえ油がそれほど美味しくない。雰囲気だけは良かったので、雰囲気を食べたつもりで満足することにした。私は情報を食べている。



天気は雨。電車に乗り、ヨークを超えた先の Drifffield 駅、そこからバスに乗って Burton Agness という小さな町へ行く。母の大学時代の知り合いであるマイケルさんとその奥さん、スザンヌさんと合流する。本日は彼らに案内をしてもらう。

まずはバートンアグネスオールドマナーへ。ここは 11 世紀のマナー・ハウスで、地階 (Grand Floor) のみが残っている。隣に大きな館を建てたあとは、使用人の居室として用いていたらしい。

太い柱とノルマン様式のヴォールトにより一階 (First Floor) の床を支えている。手の込んだ豪勢な造りであるが、ここは倉庫や納屋のような用途だったという。この石造りのヴォールトの上で生活していた。高床の基礎のような役割とも言える。装飾があるわけだが、一体この人目に触れぬ空間に、当時の人々は何の意味を見出していたのだろうか。



螺旋階段があり上に登ることができる。ソーラーがない、ホールだけの旧式のマナー・ハウスだ。てっきり地階と一階の二階建てだと思っていたが、途中で崩れているものの、さらに螺旋階段が上へ伸びている。三階建てだったらいい。ガイドをすることもあるというスザンヌさんに聞くと、この上は納屋として使われていたという。本当だろうか。

次に訪ねたのはその隣にあるバートンアグネスホールだ。マイケルさんのジャズ仲間が所有している16世紀のマナー・ハウスである。現在も使われており、よく手入れされた内装と家具、価値ある美術品が並んでいる。

所有者御一家と挨拶。案内をしてもらう。来客者にとって第一印象となるホールは、最も豪華な空間である。使用人の空間はスクリーンで別れており、姿を見せることはないように空間が隔たれている。使用人は（その種類によるだろうが）家にとって黒子的な存在だ。

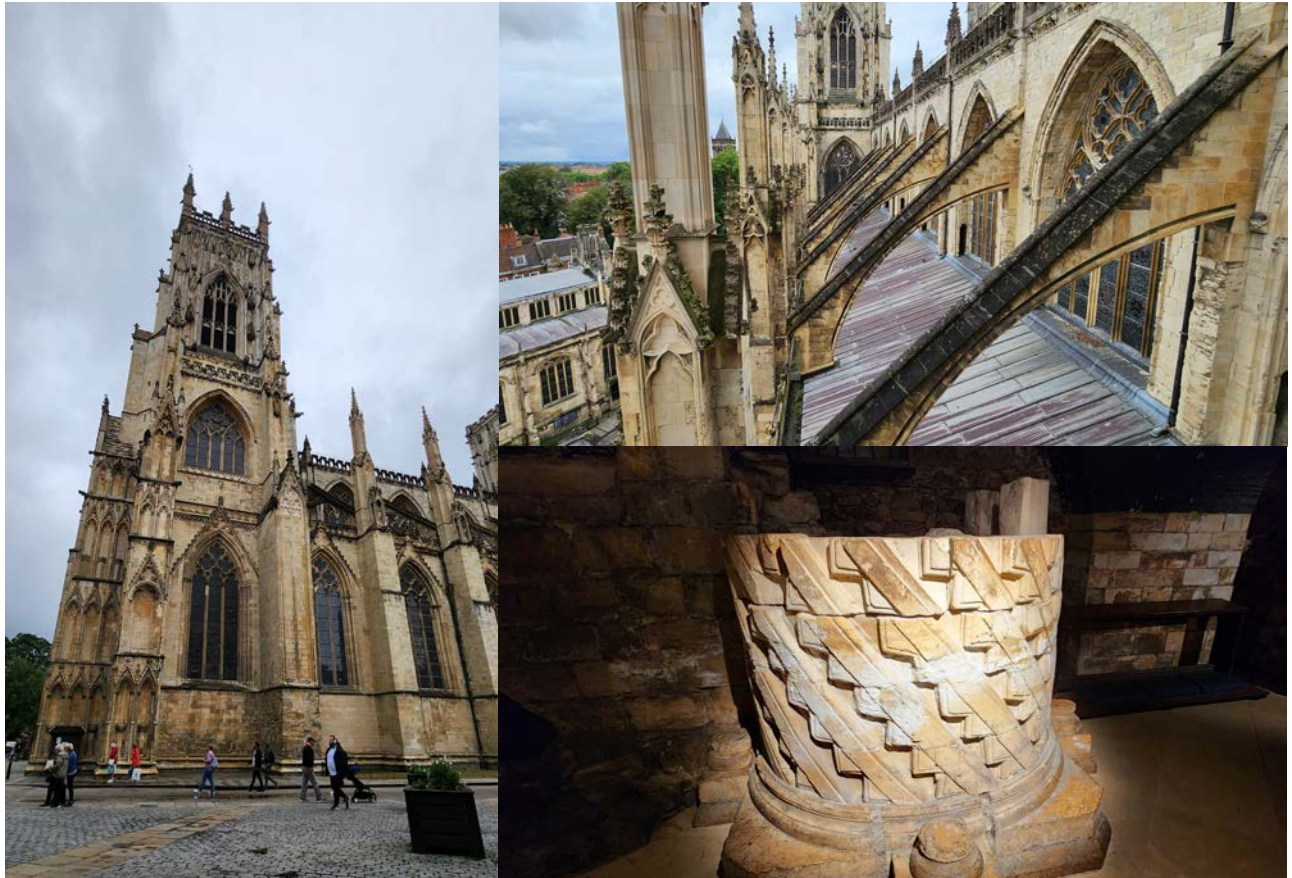


壁面の木のパネリングはそれだけでアンティーク的な価値があり、様々な時代、地域のものが集まっているという。建物の石の外壁はほとんど変化がないが、内面の壁は流動的だ。艶のある階段の柱は、最上階まで伸びている。部屋ごとに天井など様式が異なり、色合いも異なる。ホワイトルーム、ロングギャラリーには有名な絵画が集められていた。

窓から広大な庭が見える。その端でも領地は収まらず、先の農地まで広がる。花のある人に見せるための壁庭はその一角にあり、季節は外れているもののイギリスの庭園を感じることができる。

奥さんをマイケルさん宅に降ろして、マイケルさんの運転でヨークへ。カフェで軽く昼食のサンドイッチを取る。マイケルさんはデカフェのカフェラテを注文。曰く、イギリスではどこでもデカフェの紅茶、コーヒーを頼めるらしい（切らしている場合もある）。

ヨークミンスターへ移動。網目状ヴォールトを観察。上に登ることができるようで、ツアーに参加する。しかしタワーの最上階まで登るらしく、狭い螺旋階段を延々と登る。足がパンパンである。何人かご老体も参加していたが、本当にきつそうで時折螺旋階段の途中で休んでいた。フライング・バットレスを間近で見られたのは良い経験だったが、地下には過去の建物の礎石が残る。ローマ時代のものもあった。



ハリー・ポッターで有名らしい街道を歩く。ファンタジーでよくある歪んだ梁の町家が並んでいる。マイケルさん曰くこれはそういうデザインではなく、ちゃんと劣化で歪んでいるとのこと。壁が重いからだろうか。



ホテルへ帰り、ディナーを食べずにそのまま就寝。朝に食べたフライドブレッドがずっと胃の中にある一日だった。車の中で夫妻から朝食を聞かれ、フライドブレッドを話題に挙げたら「ああ、それは大変だったでしょう」と哀れまれたのである。現地人をしてこれである。恐るべきフライドブレッド。

9/13

イングリッシュブレックファストはもうこりごりだ。ということでスクランブルエッグマフィン（スモークサーモン入り）を注文。朝にちょうどいい量で美味しい。朝はこれくらいでいい。イギリスのパンやバターは美味しいので安心。



電車とバスを乗り継ぎハドンホールへと向かう。イギリスの電車は信用ならんが、バスはさらに信用ならんとわかった。数十分遅れることはザラである。時刻表などなんの意味も無い。また駅の改装工事でバス停が変わっており、しかもそのバス停がどこなのか示されない。迷ったために予定のバスを一本逃した。

イギリスのロンドン以外のバスは、停留所で待っているだけでは止まってくれない。止めるためにはタクシーのように手を上げなければならないのだ。またロンドン以外のバスは先払いで、まず行き先を運転手に伝える。値段を言うてくるので、クレジットカードの場合はカードで払う旨を話し、タッチする。このように交通機関の事情はロンドンとそれ以外でかなり異なることに注意する必要がある。

ハドンホールに到着。手前にあるレストランは有名らしい。ビートルートのパイ包み焼き的なものを注文。ドリンクは店主おすすめのスパークリングエルダーフラワー。どちらも新鮮な感覚で美味しい。ビートルートは少し甘く、肉と油だらけのイギリス食生活に一時の安らぎを与えてくれる。なお野菜は茹でてそのまま出てきた。何もかかっていない。安定のイギリスクオリティであった。



ハドンホールは一見壁に囲まれた城に見えるが、要塞化されたマナー・ハウスである。構成は実にオーソドックスで、パントリーとバタリーが改築されずに保存されている。ソーラーは一階（First Floor）にあるが、階段は後世の増築だ。昔は地階（Grand Floor）のホールからはしごで登っていたという。ソーラーと楽人の間（スクリーンの上）には古い橋のようなものが架かっている。

バタリー空間に部屋が多く、広い。規模的にはストックセイキャッスルのものに近い。真ん中のホールを中心とした空間からはずれば、後世に建てられた煌びやかなギャラリーが続いている。婦人の運動のための遊具や、ビリヤード台などがあった。

マナーハウスは斜面に建てられており、庭園と合わせて広大な景色が広がっている。整えられた庭園ではないが、横に長い城壁のような邸宅と、青い空、繁茂する緑がひたすらに雄大である。



帰路。バスを停留所で待つが何分経とうと来ない。やはりバスは信用ならない。同じく停留所で待つ老夫婦と待ち時間に談笑し、東京で買った高めのチョコを渡した。

ホテルに戻り、下のバーでダイニングをとる。注文するが、カウンターで店主が客と談笑しているため、中々料理が来ない。ルームサービスもあるのでそちらのほうが良かったかもしれないと少し後悔する。ステーキは薄めでやや硬めの肉。アメリカだと焼き加減（ミディアムレア等）は日本の感覚とズレる印象だが、イギリスではそうでもない。ミディアムレアを頼めばミディアムレアが来る。

これまでの経験からイギリスの乳製品は信用できると考え、ヨークアイスなるものを注文。非常に濃厚なミルクアイスだった。しかしデザート割には量が多い。満腹で就寝。



9/14

朝食にオムレツを注文。スモークサーモン等、具を自由に選べるらしく目についたものを適当に唱える。出来は正直なところ家庭料理が精々だ。四つ星のホテルでこれならば、ホテルの食事にはあまり期待しないほうが良いだろう。試しにデカフェでカフェオレを頼めば、確かに注文できた。これは朗報である。



タクシーであらかじめメールでやり取りをしていたマーケンフィールドホールへ向かう。運転手に行き先を告げると、知人の家かと問われた。マナー・ハウスです。道中、車の前を牛が横切っており停車。農場に囲まれた田舎だ。

マーケンフィールドホールは観光地化されていない、まだ人が住んでいる邸宅である。実用的な家具が揃えられており、地階のノルマン様式は取り払われ、現代的な柱梁へと改築されていた。壁面にはノルマン様式の痕跡が残る。ホールへと繋がる階段が作られたため、窓の配置が変わっているとのこと。それまでは壁内の螺旋階段を使っていたのだろう。ホールには同じ規模のチャペルが隣接している。上部に廊下の痕跡があり、使用人たちから一階分高い位置で領主家族が礼拝していたのだという。半地下のトイレは元々独房だったそうだ。家の方の車に乗せてもらい、バス停まで送っていただいた。バスに乗ってリーズまで戻る。



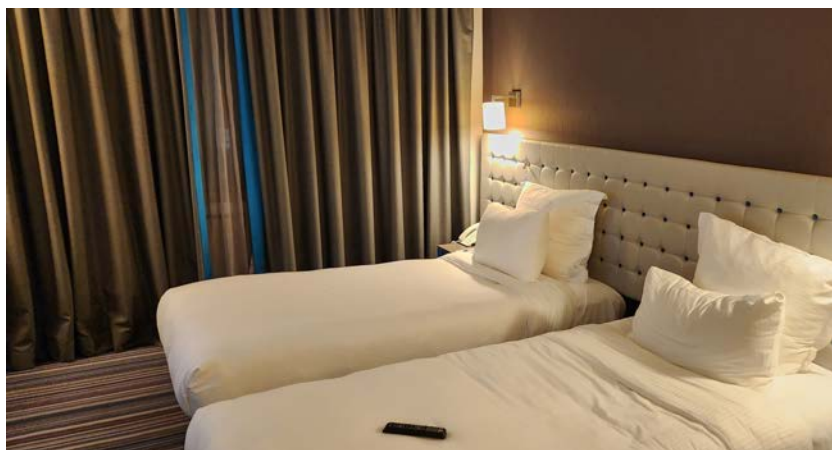
土産にウイスキーでも買おうとショップを探す。日本では中々お目にかかれないサントリー響が、逆に海外だと見ることができる不思議。スコッチを買おうかと思ったが、しかしこリーズはまだイングランドであってスコットランドではない。店員にオススメを聞いたところ、珍しくヨークで作っているウイスキーがあるのだという。まず日本どころかロンドンでも買えない、いわゆる地酒であった。一本購入。これがやたらと優しい口当たりで、フルーツのごとく香り高く、少し甘いのである。また買おうと思ってももう買えない。まだ一口分だけ余してある。



その日のうちにロンドンへ発つ。電車で二時間半の道程。鉄道会社の LNER が何周年だかで、ファーストクラス限定で記念料理が食せるらしい。ビーフシチューが食べられるとのこと（しかも、なんと見るからに美味しそう）なので楽しみにしていたが、一人前の乗客が最後であった。お情けでアップルタルトを貰う。

ロンドンは最近スリが多いらしい。田舎にいるときなどほとんど犯罪とは無縁だったが、バーミンガムやロンドンはずこしぴりついている。財布は肌身離さず、油断しないように歩く。着いたのはビジネスホテル。ここがやたら高いのであった。昨晚のホテルであるところの Quebec よりランクは低いのだが、ロンドンは万物が高いのである。きれいでちゃんとしたホテルではある。

夜、お情けのアップルタルトを食す。しかしイギリスでパイや生地は地雷である事を忘れていた。そして見事に私は地雷を踏んだのだった。



9/15

時間がないため朝食は適当にその辺で買ったサンドイッチ。

今日はアイタムモートへ向かう。このマナー・ハウスを管理している National Trust スタッフの一人、アマンダさんと事前に連絡を取り、自由に見学をさせてもらえることとなっていた。フォトグラメトリでの3Dモデル作成の許可も頂いている。電車で行くと昼頃に着くことになってしまうため、朝から調査できるようにタクシーで向かった。……お金のことは考えないようにする。

アイタムモートは谷のような場所に位置している。水堀に囲まれた口の字型のマナー・ハウスである。この水堀はもともとこの谷にあった池を埋め立てて作っているものらしかった。改築が繰り返されていて原型となる家の部分はホールと元チャペルくらいしかない。ウィンドウシートの写真を見て、この旧チャペルのものだと思っていたが、無かった。旧チャペルの地階部分（クリプト）にあることを確認。アマンダさんに聞いても、なぜここにウィンドウシートがあるかはわからないという。何故ならウィンドウとは椅子であり、居住空間にしか存在しないものだからだ。しかしクリプトは物置であったり、酒の保管場所であったりする。他のマナー・ハウスにあるウィンドウシートよりも座面が低い場合、実は椅子ではないのかもしれない。窓の場所にはかつて堀に繋がる排水口があったという。ワインを作るのにクリプトを使っていた時期があるとの事で、そのためにウィンドウシートのような形状が役に立っているのかもしれない。しかしそれが元来の用途なのかは不明。その排水口とやらは埋められてしまっている。

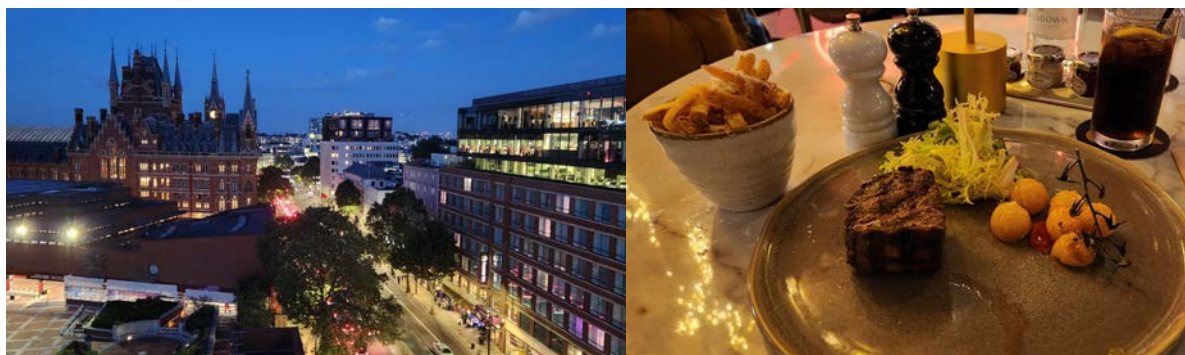


昼食は坂を登った入口にあるカフェで。ベイクドポテトをいただく。じゃがバターのように挟まっているのはツナマヨだ。イギリスにおいてツナマヨはよく見られるトッピングである。いたるところにツナマヨがある。焼いたじゃがいもにツナマヨ、不味くなる要素はない。実際美味しかった。付け合わせの野菜も綺麗だ。特にドレッシングはないが。

一通り内部の写真を撮り、外へ。よく整えられた壁庭があり、季節の花が咲いている。お礼をして、帰ることにする。ここからではUber タクシーを呼べない。最寄りのバス停まで徒歩30分。歩けない距離ではないと思い歩いていたが、また車が私の横に止まり、声をかけられた。今度は老夫婦。ここから歩くの？正気？とすら言われる。私がバスで行こうとしていた駅のある街（Tonbridge）は彼らの目的地ではなかったが、夫婦でマップを見ながらこう行けば寄れると相談して、乗せてもらった。降り際に「ありがとう、いくら払いましょうか」と聞いたら笑ってもらえた。また日本から持ってきた高めのチョコを渡してお礼とした。

電車で揺られ45分。St.Pancras 駅へ。赤レンガの歴史ある駅だ。ラグビーワールドカップの開催期間であるため、駅内にも広告がある。アサヒスーパードライがスポンサーなのでその広告が。まるでここだけ日本である。St.Pancras 駅に隣接する Kings Cross 駅はハリー・ポッターで有名。そこから大英図書館を挟んだところにあるビルが、私が泊まっているホテルである。夜、ホテルのエレベーターホール窓から大英図書館と St.Pancras 駅を望む。

ホテル一階のレストランで夕食を。メニューにあるのはステーキやフライドポテトとアメリカンだ。ウェイトレスのサービスの質が格段にいい。フィレステーキを注文。分厚くゴロッとした肉の塊。柔らかく臭みもない、この国に来て一番のご馳走であった。今までのどのレストランよりも質がいい。サラダには特製の美味しいドレッシングがかかっている。（この国においては画期的だ）ロンドンにいる間はここで飯を食うことに決めた。



9/16

このホテルも朝食はイングリッシュブレイクファーストのビュッフェだ。不味くはないのだからいかに飽きる。そして例によって野菜はズッキーニのスライスくらいしかない。チーズは選り取り見取りで美味しかった。



連日の移動や調査で疲労が溜まっており、部屋にて惰眠と怠惰を貪る。午後五時になり適当にロンドンを観光。サマータイムなのでまだ明るい。ビッグベン、ウェストミンスター寺院、バッキンガム宮殿を訪問。時間がない上この時間だと閉場しているため、外見だけ眺めて終了。きちんと見たければ、またロンドンに来て観光すればよい。ちなみにロンドン内の地下鉄が乗り放題のパスがあるが、イングランド内の鉄道乗り放題パスとは別物なので注意が必要である。ロンドン内外では電車のルールは別物だ。地下鉄はクレジットカードをタッチするだけで乗れる。



二階建てのバスに乗って、夜のロンドンを帰る。田舎のバスと違い、こちらもクレジットカードをタッチするだけで乗車可能。

夕食はバイクドカマンベールチーズ、そしステーキを注文。今日はサーロイン。大きくて厚みがあり、柔らかいながらもアメリカンなガッツリ感を味わえる上等のステーキであった。デザートにはスティッキー・トフィー・プディング。イギリスでは定番らしい。デーツの生地キャラメルソースをかけたもの。メニューには抹茶チーズケーキもあった。



9/17

大英博物館へ行く。入場無料で、日曜の日中だから人が多い。観光客は展示物を見て、現地住民はくつろぎに来ている印象であった。セキュリティチェックを通り、いづらか寄付して入場。

ここは広く展示数も膨大であり、周り切るには一日かかる。いや、それ以上かかるかもしれない。ロゼッタストーン、ラムセス2世像、ミイラ、モアイ像、ハリー・ポッターに登場したというチェス駒など主要展示物を一通り周る。中央の土産物売場でロゼッタストーンTシャツ、ロゼッタストーンUSBを購入。売り場にはあらゆる浮世絵をデザインしたものがある。しかしその浮世絵、展示物にはなかった気がするが……。館内のレストランはかなり高かったので、ここで食べるのはやめておいた。



イギリス土産を買うため Piccadilly Circus へ。道中 HIS の店を発見。日本からの輸入品を取り扱っていた。CCレモンを購入。イギリスのレモネードはレモン果汁そのままに少し砂糖といった感じで、胃に優しい。甘ったるいCCレモンはいい安息となった。



日本には店がないイギリスの紅茶を買おうと、Whittard へ行く。ロンドン市外だとほとんど見なかった日本人観光客を、ロンドンではよく見るようになった。Whittard 店内で日本人二人組がいたため、軽く話す。彼らも紅茶のことはよく知らないが、ここは English Breakfast が有名とのこと。店員にオススを聞き、家用と研究室用にティーバッグを購入することにする。店内には試飲が色々あった。

昼食はフィッシュ & チップスだ。これを食べるならフィッシュ & チップス専門店ではなく、バーで食べるべきという忠告をもらっていた。しかしこのときの私は忘れており、道中あったフィッシュ & チップス店に入った。店内はファストフード特有の汚さはあったが、幸いにも味は美味しかった。後で聞くにこれはレアケースだという。フィッシュ & チップスはバーで食べるものだという事は覚えておくべきである。



初日、飛行機の隣の席の彼に聞いた、ロンドンのおすすめスポットの一つが郊外の公園であった。駅から相応に歩くと、ロンドン街を一望できる丘がある。公園自体はロンドンにほど近いというのに、森林の冷たさが肌に心地よい。

途中、エレベーターのボタンが特殊だったため困っていたところを助けられる。イングランドの人々は基本的に親切だ。マイケル氏は気候とは逆に、イングランド人は北に行くほど人が良くなり、南へ行くほど冷たくなるのだという。確かにこれまでの旅行では、眼が合うと話しかけられ、日本人だと言うと驚かれ、私の拙い英語に付き合ってくれた。ロンドンではそれはない。だが冷たいことと親切なことは相反しないだろう。困っていると、ハンドサインやらでやり方や行き先やらをサラッと教えて、サラッと去っていく。そういう土地だと感じるようになった。ちなみに高級店以外の店の人はどこもあまり親切ではない。

夜はテムズ川のほとりで、ラグビーワールドカップの日本対イングランド戦をパブリックビューイングで観戦する。テムズ川を挟んだ先にロンドブリッジとロンドン塔を眺む広場に、大きなスクリーンが設営されている。ヨーロッパ一周旅行をしているという日本人と会い、しばらく二人で観戦。曰くイギリスは最後の国で、ここまで巡った国の中で一番物価が高いとのこと。後半から別の留学生日本人グループと合流し、5人くらいで並んで観た。結果は、順当に日本の敗北であった。



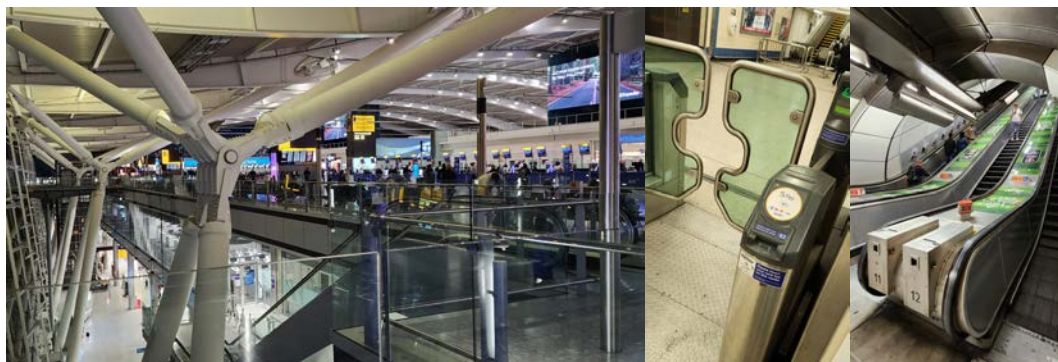
9/18

大英図書館はオンデマンドで資料を見るためにリーダーズパスが必要となる。しかしリーダーズパスは大英図書館を実際に訪ね、身分と住所の証明をしなければならない。その上英語の訳文を別でつける必要がある。午前中に訪ね、一通りの手続きを行う。それ自体はスムーズに終わった。

リーダーズパスが有効となるまで時間がかかるため、ホテルに戻り昼食をとる。クロックムッシュを注文。ここは朝食以外は本当に料理の質が高い。いや、朝食も美味しくはある。代わり映えがせず飽きが来るといっただけだ。



リーダーズパスが有効となったため、再び大英図書館に赴く。オンラインであらかじめ読みたい本を予約し、指定の読書室へ行く。カウンターで受けとり、テーブルを借りて読むことができる。書籍はスキャンも写真撮影も自由である。後に翻訳するために大量に撮影する。オンデマンドで見られる本は今回省いた。一日に借りられる数に制限があるからだ。しかし私はこの判断を後悔することになる。帰国直後大英図書館のサーバーが落ち、オンデマンドでの閲覧も検索もできなくなったためである。



図書館を発ち、地下鉄でヒースロー空港へ、さらにそこからバスでホテルへ向かう。明日の朝の便に乗るため一泊するのである。イギリスではそこかしこにアメリカンなピザ屋があるのだが、ついぞ一度も入らなかった。部屋にデリバリーできるようなので、ピザを注文。しかしイギリスのピザがアメリカンであることを私は失念していた。つまるところ、デカイのである。パーティー用だ。とても一人で食せる量ではない。若干の吐き気を催しつつ、二切れほど残した。血糖値の高まりを感じながら就寝。

9/19

ヒースロー空港から羽田へ。隣になったのは、お喋りな中年の日本人女性。夫がイギリス人らしく、結婚してからイギリスに移住したとのこと。しかし何十年と経っているのにあまりイギリスの生活に馴染めないらしく、愚痴が止まらない。おかげで私がこのイギリス旅行で良くも悪くも感じた印象は、おおよそ国内において普遍的なものであることが察せられた。

結構な程度にイギリスのことをこき下ろしていたので、反対側の席のイギリス人が日本語を解していないことを祈るばかりである。話の流れで私が小説を書いていることを明かすと、なぜか彼女の人生相談が始まった。話の発端はなんだったか。確か、彼女が「私の人生ってどんな小説になるのか」と問うたことが切っ掛けであっただろうか。小説についての話の流れであったので、女性が過去に行った言動を聞きながら、読解するように人物像、パーソナリティを自分なりに言語化する。無論私はプロファイリングなど知らないし、カウンセラーでもなければ占い師でもない。詐欺師のように思いついた言葉をそれらしく並べただけであるが、彼女は「なんで私のことそんなにわかるの」といたく感じ入った様子であった。イギリスにおける日本人のコミュニティで上手く行っていないらしいが、今後詐欺師や似非占い師に騙されないか心配だ。なんだか良いことをしたような、悪いことをしたような出来事であったが、私のイギリスへの旅はそうにして終わったのであった。

後記・執筆者略歴
Postscript

* * * * *

○卒業論文「池辺陽 モジュール研究の軌跡とその特質」を省みて

小岩正樹研究室 B4 松野良郁

この文章を書いたのはもう 1 ヶ月以上前になる。私が重要だと思うのは、間違っている言葉を残すことであり、それを未来の自分が、あるいは他者が破壊することである。

松野良郁
2003 年生まれ
2025 年 3 月早稲田大学創造理工学部建築学科卒業
2025 年 4 月早稲田大学創造理工学研究科建築学専攻入学
卒業論文「池辺陽 モジュール研究の軌跡とその特質」

○イギリス旅行記

小岩研究室 OB 齋藤祐希

皆さん真面目な原稿を書かれている中ただの旅行記で申し訳ありません。文句ばかり書いていたような気がします
が、イギリスはいい国です。言葉は英語だしみんな親切で。ぜひロンドン以外にも行ってみてください。

齋藤祐希
1999 年生まれ
2022 年早稲田大学理工学部建築学科卒業
2024 年早稲田大学院理工学研究科建築学科修士課程修了
修士論文「フランス大年代記における挿絵「サン・ドニの建設」の表現方法について」

お知らせ
Submission

○「史標」原稿募集規定

本誌への投稿を歓迎いたします。論文、報告、書評、人物紹介、随筆等、内容は自由。建築学以外の論考に関しても可。以下の連絡先までご連絡いただければ、フォーマットテンプレートをお送りいたします。原則として、偶数ページにおさめることとし、図版には典拠、キャプションを付加してください。また、執筆後期 (210 文字以内)、略歴 (124 文字以内) のご送付もお願いいたします。

○質疑・討論原稿募集規定

掲載原稿に対する質疑や、討論の申し込みも受け付けております。ページ数は自由で、その他の原稿の形式に関しては上記のものと同一で構いません。提出期限は随時。多数のご質問・ご批評をお待ちしております。

○お問い合わせ

〒 169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1
早稲田大学西早稲田キャンパス 55N 号館 8 階 10 号室
建築史研究室内 O. D. A.「史標」出版局
TEL: 03-5286-3275
Mail Address: shihyo@lah-waseda.jp

「史標」第 74 号

2024 年 5 月号 (2025 年 5 月 01 日発行)

編集：今村倫里伽、引間聖乃

〒 169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1
早稲田大学西早稲田キャンパス 55N 号館 8 階 10 号室
建築史研究室内 O. D. A.「史標」出版局
TEL: 03-5286-3275
Mail Address: shihyo@lah-waseda.jp